

イソップ物語についての一考察

野村 夏治

A Study on Aesop's Fables

Natuji NOMURA

はじめに

イソップ物語にみられる道徳的教訓について、「セミとアリ」の話を取りあげて、西洋人の倫理と日本人の倫理を比較考察する論文¹⁾をある雑誌で読んだ。「セミとアリ」の話の終わりの部分が「少し食べ物を与えた」というように、日本的受容を受けていると指摘している。その一例に『天草版伊曾保物語』²⁾の「セミとアリ」の話あげ、さらに、戦後に出た子供向けの絵本のなかの「アリとキリギリス」の例をあげている。そして、「翻訳するといっても、実は子供向けにその国その時代の倫理に応じて書きあらためられている」としている。その鋭い指摘や、フランス人が意外に締り屋であるとの話を興味深く読んだ。

この論文は倫理の問題を取りあげているが、私はまず翻訳の問題を考えてみたい。また、「セミとアリ」の話であったものが変化して、イギリスでは「キリギリスとアリ」の話になってしまうのはどういう理由があるのかを調べて整理してみたい。

「セミとアリ」について

『天草版伊曾保物語』と『国字本伊曾保物語』³⁾

天草版は1593年(文禄2年)天草のイエズス会のコレジョからローマ字で出版された口語の翻訳で、その原本一部だけがロンドンに現存している⁴⁾。わが国に渡ってきたラテン語あるいはポルトガル語の書物にこの寓話がいっていたと考えることができる。これに対し、国字本は9種あるが、訳者などわからぬことが多々ある。最も古いと考えられる第1種の刊行は、ふつう(文禄に続く元号の)慶長・元和ごろと認められている⁵⁾。上述の両書には直接の関係は認めがたいとされていて、寓話にいたってはいっそうその差が著しく、天草版は70話、国字本は64話を収めているが、共通の話はわずか25話にすぎず、それも内容や文章に精粗の差がはなはだしい。しかし、諸学者の研究によれば、両者に共通の祖本としての文語訳の広本が存在したのであろうと推定されている⁶⁾。

まず両書の訳文を示し、その文について考察してみる。

(天草版) 蟬と、蟻との事⁷⁾

或る冬の半に蟻ども数多穴より五穀を出て日に曝し、風に吹かするを蟬が来てこれを貰うた、蟻の言ふは、「御邊は過ぎた夏、秋は何事を營まれたぞ？」蟬の言ふは、「夏と、秋の間には吟曲にとり紛れて、少しも暇を得なんだによって、何たる営みもせなんだ」と言ふ、蟻「げにげにその分ぢゃ、夏秋歌ひ遊ばれた如く、今も秘曲を盡されてよかろうず」とて、

散々に嘲り少しの食を取らせて戻した。

下心。

人は力の盡きぬ中に、未来の務めをすることが肝要じゃ、少しの力と、暇有る時、慰みを事とせう者は必ず後に難を受けいでは叶ふまい。

(国字本) 第一 蟻と蟬との事⁸⁾

去程に、春過夏たけ、秋も深くて、冬のころにもなりしかば、日のうらうらなる時、蟻穴より這ひ出、餌食を乾しなどす。蟬きたって蟻と申は、「あないみじの蟻殿や。かゝる冬ざれまでも、さやうにゆたかに餌食を持たせ給ふものかな。われにすこしの餌食をたび給へ」と申ければ、蟻答云、「御邊は、春秋の營みにはなに事をかし給ひけるぞ」といへば、蟬答云、「夏秋身の營みとては、木末にこたふばかりなり、その音曲を取り亂し、ひまなきまゝにくらし候」といへば、蟻申けるは、「今とてもなど歌ひ給はぬぞ。謡長じてはつゐに舞とこそは承はれ。いやしき餌食をもとめて、何にかはし給ふべき」とて、穴に入ぬ。

そのごとく、人の世にある事も、我力におよばんほどは、たしかに世の事も營むべし。ゆたかなる時つづまやかにせざる人は、貧しうして後、悔ゆる物なり。さかんる時學せざれば、老て後悔ゆるものなり、酔ひのうちに亂れぬれば、醒めての後悔る物なり。返々も是を思へ。

両者を比較すると、もちろん大きな違いは「少しの食を取らせて」と天草版になっていることである。内容以外では句読点の用法に天草版独特のものがある。「言ふ」の後など、ふつう終止形で句点であるところが、読点になっている。ローマ字本の原名は *Esopo no Fabulas*。『イソップの寓話』と句点が打ってある。

天草版は『平家物語』及び『金句集』とともに合冊して、外人宣教師が日本語の教科書として用いるために出版されたものである⁹⁾。外人宣教師が日本人の弟子に命じて訳させたのであろうというが、「訳文に九州方言とみられる語があるので、訳者は肥前生まれの修道士であろう¹⁰⁾」という説がある。この本の表題と序文には「ラテン語から日本の言葉へ」と印刷されているのだが、諸研究によれば、直接ラテン語から日本語の口語文に訳されたとは考えられず、これより先に文語体の訳文があったと推定されている¹¹⁾。共通の祖本があったという。そうすれば修道士が祖本をもととして口語文に書き改めたことになる。この本は、天正少年使節が日本へ持ち帰った活字印刷機で印刷されたものであり、勝手に修道士の考えだけで修正がなされたことは私には信じがたい。

岩波文庫『イソップ寓話集』と岩波少年文庫『イソップのお話』

現在の訳文の代表としてこのふたつを取りあげよう。『イソップ寓話集』¹²⁾は初版が昭和16年で、『イソップのお話』¹³⁾は初版が1955年である。両者の訳文はきわめて簡潔でよく似ているが、両者ともギリシア語原文からの翻訳である。

(岩波文庫) 蟬と蟻たち

冬の季節に蟻たちが濡れた食糧を乾かしていました。蟬が飢えて彼らに食を求めました。

蟻たちは彼に「なぜ夏にあなたも食糧を集めなかったのですか。」と言いました。と、彼は「暇が無かったんだよ、調子よく歌っていたんだよ。」と言いました。すると彼らはあざ笑って「いや、夏の季節に笛を吹いていたのなら、冬には踊りなさい。」と言いました。

この物語は、苦痛や危険に遇わぬためには、人はあらゆることにおいて不用意であってはならない。ということを示唆しています。

(岩波少年文庫) セミとアリ

冬になって、穀物が雨にぬれたので、アリがかわかしていますと、おなかのすいたセミがきて、たべものをもらいたいと言いました。

「あなたは、では、なぜ夏のあいだに、たべものをあつめておかなかったのです。」

「ひまがなかったのです。歌ばかりうたっていましたから」と、セミはこたえました。

するとアリは、笑っていました。

「夏のあいだうたったなら、冬のあいだ踊りなさい。」

あとで悲しんだり、危険にあたりしないためには、すべてのことに気を付けていなければなりません。

イソップとイソップ寓話の成立

イソップの名が歴史に残っている最初の記述は、ヘロドトス（前5世紀のギリシア最古の歴史家）の『歴史』の第2巻で、「ギリシアにイソップという人がいて、寓話を作ったり、話したりして名声を得ていた。どれいであつたらしい…」と記録されている¹⁴⁾。ヘロドトスは小アジア生まれで、オリエント諸国を歴遊してその見聞を豊富にとり入れて、その本を書いたと言われている。いろいろの記述から、「イソップの生きていた時代というのが、だいたい西紀前6世紀の中ごろと推定されます。その時代はヘロドトスの生きていたころからわずか百年たらず前のこと…」¹⁵⁾とされている。「イソップがギリシア人ではなくて、東方の生まれであつたらしいことは、イソップの寓話の主人公が、小アジアに関係の深い、ライオンやキツネ、オオカミ、カメなどであることから、推しはかることができます。」¹⁶⁾としている。

イソップ寓話は一時衰え、再び紀元前第4世紀の思想的にみれば、道徳的考察の隆盛になった時代によみがえったという、イソップの名をよくひきあいに出している人に、アリストファネス（前4世紀のアテナイの喜劇詩人）・プラトン・アリストテレスがある。「ソクラテスもあまり上手にはないがイソップ寓話を作ったということであり、また、プラトンの『パイドン』にはソクラテスが牢獄に死刑を待ちつつ、散文のイソップ寓話を詩形に改めたことが語られている。」¹⁷⁾ということである。このことは、この時代にも他人の作がイソップの作とされていたことを示すものといえよう。それから300年後プルタルコス（プルターク）（紀元1世紀のギリシアの歴史家）は、イソップを哲人ソロン（アテナイの政治社会制度の大改革を行なった）の友人として活躍させている¹⁸⁾。このことから、イソップが当時も人気があつて、彼の寓話が一般民衆の処世訓であつたと考えることができよう。

プラトンの時代から300年後、ギリシア系のローマ人パエドルスがイソップ風の寓話を集成し¹⁹⁾、彼の死後200年余ローマの詩人バブリウスが寓話集を編さんした。これらのものがその他の流れを集め、中世を経て近世のイソップ物語としてひろく流布するようになったという²⁰⁾。

上記の岩波文庫には寓話が358、少年文庫には300選ばれている。両者のギリシア語の原本は、前者が1927年出版のもので、後者が1901年と1925年出版のふたつであり、少年文庫の原本

には 426 と 362 の物語があるとのことである。このようにイソップの名を冠しているもののいづれが真の彼の作であるかを見きわめることはきわめて困難である。

ラ・フォンテーヌの寓話詩

(ラ・フォンテーヌ) セミとアリ²¹⁾

セミさんは歌いくらして
ひと夏すぎて
北風のふくころともなれば
食べるものはすっからかん
ハエのかけらもミミズもない
そこでとなりのアリさんに
なきごとをいいにいきました
春まで命をつなぐため
ムギをすこしかしてください
「虫の誓い まもりますわ
夏までに おかえしします
元はもちろん利子つけて」
アリさんはひとにものかすひとじゃない
かすなんて とんでもないこと
「あついときには なにをしたのよ」
と かり手にたずねれば
「よるもひるもあいてかまわず
歌をきかせていましたの
気を悪くなさらないでね」
「うたってたですって
そうしたら きらくにいえるわ
それじゃこんどは おどったらどう」

ラ・フォンテーヌ (J. de la Fontaine 1621-95) はフランスの詩人で、動物を主人公にして 200 あまりの寓話詩を書き、動物に託して鋭い風刺を示した。彼は寓話というジャンルのなかで大きな位置を占めている。現在、子供向けの動物を主人公にした絵本には、イソップとならんでラ・フォンテーヌのものがわが国でも多く出版されている。

寓話は古代バビロニア・アッシリアに始まったという²²⁾そして、ギリシアではイソップ寓話となった。中世にもまたたいへん人気が出て、それが集大成されて叙事詩になったもののなかで有名なものが、12世紀の **Reynard the Fox** (きつねのレナード) という風刺作品であろう²³⁾これは、機智に富みかつ雄弁であるが誠実のないきつねがライオンその他の動物を功妙にあざむくという話で、愚直な信者や単純な軍人をほんろうする才人を風刺したものである²⁴⁾いうまでもなく、英文学のなかでも鋭い風刺の流れは続いている。

「セミ」と「キリギリス」について

フランスの昆虫学者ファーブル (J.H. Fabre 1823-1915) は蜜蜂、あり、かぶと虫、キリギリ

ス、クモなどに興味をもち、有名な『昆虫記』を書いたが、蟬のところでわざわざ「蟬と蟻との寓話」²⁵⁾という章をもうけて、彼はこの寓話に対するふんまんを表わした。「この寓話作者はしゃくにさわる。お前が決して口にしないハエやうじ虫や、麦粒なんぞを、冬お前が求めにゆくなぞとぬかしていることだ。」²⁶⁾この本は昆虫の生態を科学的・文学的に描いた動物文学の傑作であるが、彼は、セミはギリギリスのまちがいたとして、ラ・フォンテーヌとギリシアの作家をののしった。彼らは事実を見ようとせずに伝説に従ったと非難した。

すでに述べたようにラ・フォンテーヌは寓話に生きた詩人である。また、ギリシア人はあの自由奔放な空想に富むギリシア神話をもつ民族である。ミューズという名は芸術を受け持つ9人の女神の総称であるが、9人の女神がそれぞれ叙事詩、叙情詩、歌というように芸術の9分野を受け持つ。これからもわかるように、ギリシア人は芸術にすぐれた民族である。ここで、ギリシア人がセミをどのように考えていたかを示すきわめて興味深い資料をあげてみよう。

セ ミ²⁷⁾

こういう話があります。セミはむかし、ミュウズの女神たちが生まれるまえは人間でした。ミュウズの女神たちが生まれて歌をきかせますと、人間の中には、その歌の美しさに夢中になって、たべることも飲むこともわすれて、歌ばかりうたっているうちに死んだ者がありました。このなかまから、セミが出てきたのです。が、ミュウズの女神たちは、この歌のすきな人々にほうびとして、ものをたべたり飲んだりせずに、死ぬまで歌をうたえるようにしてやったのです。(プラトン「ファイドロス」より)

「セミとアリの寓話」はきわめて不自然ではあるが、ギリシア人がセミにこのようなイメージをもっていたとすれば、食べものが麦であってもかまわないことになる。ギリシアは伝説に生きていたのだと思う。「古典的古代は蟬を非常に尊重していた。」²⁸⁾とフェーブルは述べて、蟬に対する賛辞がひどく大げさなものであると言っているから、要は立場の違いであろう。

フェーブルのこの章にはきわめて示唆に富む文がある。この寓話は幼いときの暗記練習の課題であったと言い、アテナイの子供たちも、通学の道々、蟬の話をも暗唱のけいこにやっていたと言っている。彼はこの寓話はインダス河の岸辺で始まったとし、「最初の寓話の主要人物は我々の蟬ではなくて、何か他の動物—あるいは昆虫でもよい—で、その習性が、書かれた文章とぴったり一致しているものであったに相違ない」²⁹⁾と書いている。「ギリシア人は、インド人の語る昆虫がギリシアの野原にいなかったのも、ちょうど近世のアテナイともいうべきパリで、蟬がギリギリスにかえられたと同じように、大体似ているところから、蟬を持ってきたのである。この辺から間違いが始まった。」³⁰⁾としている。インドでこの寓話が始まったという説は興味深い。小学館の絵本『新イソップ物語』³¹⁾では訳者はフェーブルの立場に立って、「セミとアリ」というラ・フォンテーヌの詩を「アリとギリギリス」にかえている。しかし、私は、インド起源の話が古代のアテナイに伝わってきてイソップの寓話になったというのは、ひとつの推定にすぎず、現段階ではそれを裏付ける説は出ていないのではないかと思う。

イギリスではセミがギリギリスにかわってしまっているその理由を考えるのに参考になる言葉が、フェーブルの「パリで蟬がギリギリスにかえられた…」という上記の文である。いつなのかは書いてないが、フェーブルの時代かそれ以前に事実と反しているということにかえられたのであろう。「ところが、蟬は『兎のジャン公』がぴょんぴょん跳ねる地方では見られない。ラ・フォンテーヌはついぞ蟬の声を聞いたこともなければ、見たこともなかった。彼にとって

は、名高い歌姫は、きりぎりすであったに違いない。」³²⁾とフェアブルは述べている。

蝉が住んでいる地域については、芹沢栄氏の記述³³⁾を引用すると、「せみは熱帯・亜熱帯地方に多く、温帯に住むものもある。イギリスに住むものはただ1種類である。」地図を見ると、いうまでもなくロンドンの緯度は北緯52°に近く、フランスでも北部はカナダと同じ緯度にある。気候は必ずしもその位置のとおりではないが、蝉の声はギリシアから北上するにつれてしだいに聞かれなくなる。イギリスへこの寓話が年月を経てから伝わったと考えれば、最初から「キリギリスとアリ」であったとも考えうるが、イギリスには蝉がいないのでいつとはなしに「セミ」がきわめて自然な「キリギリス」にかわっていったのであろう。

なお、イギリスで活版印刷を始めたのはウイリアム・キャクストン (Caxton ?-1491) であるが、1478年初めてカンタベリ物語を印刷し、1484年イソップ寓話集を翻訳印刷したとされている³⁴⁾この初版では「セミとアリ」はどのようなになっていたのであろうか。

アメリカのグローリア百科事典には、イソップが原作者であると考えられている寓話は「きつねとぶどう」、「北風と太陽」、「ライオンとねずみ」であり、ラ・フォンテーヌが好んだものは「キリギリスとアリ」、「さるとねこ」、「きつねとからす」とか「うさぎとかめ」³⁵⁾と出ている。この記事から、現在では、「セミとアリ」と「キリギリスとアリ」はその歴史的な背景にかかわらず区別されずに使われていると考えることができよう。

「アリ」と「キリギリス」について

昭和5年版(初版は昭和4年)の研究社英文訳註叢書³⁶⁾の訳をあげる。

「アリとキリギリス」

アリとキリギリスが広い原に住んでいた。アリは冬の用意に貯えるため始終せせとたくさん穀粒を集めていた。アリたちは自分らの楽しみになるようなことをめったにしなかったもので、彼らの陽気な隣人のキリギリスはとうとうアリのことなどほとんどかえりみなくなった。

霜がやって来ると、アリは働けなくなったし、キリギリスは陽気に騒げなくなった。ところがある晴れた冬の日、アリたちがその穀粒を日なたにひろげて乾かしていると、たまたま一匹のキリギリスがほとんど飢え死にしそうになって、通りかかった。

「今日は、アリさん。」とキリギリスはいった。「少しばかり食べ物を貸していただけない？ 来年の今頃までにはきっとお払いするわ。」

「ご自分の食べ物がないなんて、どうしたっていうんです？」と一匹の年とったアリが尋ねた。「私らが夏中住んでいた原にはしこたまあったじゃありませんか。であなたがたはなかなか活動してらしたようですのに、何してらしたんですか？」

「ああ、」とキリギリスは飢えを忘れていった。「わたし一日中歌ってましたわ、それからまた一晩中。」

「なるほど、じゃ、」とアリがさえぎった。「夏中歌ってそんなにお楽しみだったのでしたら、冬も、ひとつ踊り暮らしてごらんになったらいいでしょう。」そういってアリは自分の仕事を続けた。そしてその間中古い歌を歌っていた。

「わたしらアリは人から借りない。わたしらアリは人にも貸さない。」

仮名づかいを改めているので、この訳文からはわかりにくいかもしれないが、この英文は文

語的なものである。その気持ちを「しこたま」という言葉で表わしてあり、その語はむずかしい abundance である。そのほかの表現は省略するが、とても暗唱用のものとは思えない、内容については、最初のところがアリとキリギリスにふさわしく「広い原に住んでいた」となっている。そのほかでは、「アリたちは自分らの楽しみになるようなことはめったにしなかったの」という箇所と、文尾の「アリは人から借りないし、人に貸さない」という箇所が、今までのものと違っているし、文尾の言葉が今までどおりの教訓とは異なっている。

アメリカの少年少女向けの本から私が写したものがあるが、内容が上記の文とよく似ているので引用することをやめる。その物語は「ある晴れた冬の日アリたちは野原で働いていた」で始まり、「あなたにはけっして食べ物を貸しませんよ」で終わっている。とくに最後が「貸さない」という文で終わっている点からも、このふたつの英文は同じ流れのものと考えてもよいと思う。

この寓話にみられる道徳的教訓について

以上いくつかの例文から、物語の内容そのものが少しずつ変遷を重ねてきて、子供向けには短いものにかえられていることがわかる。話のしめくくりの教訓にも多少の違いがみられる。ところが、最後にあげた英文では、しめくくりが全く違っている。これは、ひとつにはイギリスがラ・フォンテーヌの寓話詩などの流れの影響を受けたためであると考えることができよう。ギリシア語の物語からはだんだんかわってきていて、その国その時代の倫理に應ずるためのものであろうが、イソップ寓話の内容の多少の手直しはもちろんのこと、その道徳的教訓そのもののもつ意義や価値が問題にされたため、ついにはしめくくりの言葉まで変えられたのであろう。

フランスでは、小学校へはいると、ラ・フォンテーヌの寓話の暗記を命ぜられたという。美しいフランス語の詩と、人間性にふれる子供向けの物語ということからであろう。しかし、寓話にも科学の問題がはいりこんできて、セミが冬まで生き長らえてアリのところへ麦をもらいに行くのはおかしいということになってきたのであろう。ところが道徳の立場からとりあげて、この寓話を子供に教えるのはよくないとしているのがジャン＝ジャック・ルソーである³⁷⁾『エミール』(第二篇)では、「セミとアリ」の寓話では、おとなは子供にセミを反省の種に示したつもりでいる。ところがけっしてそうはならない。(中略)世の中でもっともいとわしい怪物は欲ばりで情知らずの子供だ。(中略)相手の頼みを拒んだうえ、相手を嘲笑することを、子供たちに教えているのだ。」とある。

作家でこの寓話をとりあげて皮肉たっぷりの短編小説を書いた人もある。それはイギリスのモーム (W.S. Maugham 1874-1965) で、題名は「アリとキリギリス」³⁸⁾である。子供のときラ・フォンテーヌの「アリとキリギリス」を暗唱させられたという書き出しに始まって、この寓話はひとりの男を思い出させるという。あるアリのように働く男が、かけごとを好み浪費癖のある弟のしりぬぐないを20年以上にわたってさせられている。その遊び人の弟が年上の未亡人と結婚し、やがて大遺産を手に入れる。それを知った兄は世の中は不公平だと激怒する。モームの文学は劣等観の文学だとか傍観的冷笑主義だとか評されるが、彼は世間の現実を冷ややかに描き出している。イソップ寓話のうち英文にだけみられる「アリたちは自分の楽しみになるようなことはめったにしなかった」という箇所が、モームの短編小説と一致するのは偶然であろうか。この寓話が他の寓話と違って、多くの人々に波紋を投げかけてきたことだけは確かだといえよう。

注

- 1) 浜口恵俊編：現代のエスプリ, 178, 107～117, 至文堂(1980)
- 2) 森田武他編：古典文学大系 90, 仮名草子集, 岩波書店(1967)
- 3) 新村出他編：日本古典全書, 吉利支丹文学集下, 朝日新聞社(1964)
- 4) 同上 195
- 5) 同上 198
- 6) 同上(仮名草子集) 24
- 7) 同上(吉利支丹文学集下) 275, 276
- 8) 同上(仮名草子集) 432, 433
- 9) 同上(吉利支丹文学集下) 195, 196
- 10) 同上 197
- 11) 同上 198 同上(仮名草子集) 24
- 12) 山本光雄訳：イソップ寓話集, 岩波文庫, 253, 岩波書店(1981)
- 13) 河野与一編：イソップのお話, 岩波少年文庫, 6, 岩波書店(1981)
- 14) 同上 341
- 15) 同上 342
- 16) 同上 343
- 17) 同上(岩波文庫) 272, 273
- 18) 同上(岩波少年文庫) 342, 同上(吉利支丹文学集下) 186
- 19) 同上(吉利支丹文学集下) 191
- 20) 同上 192
- 21) 川田靖子訳：ラ・フォンテーヌ寓話 I, 4, 5, 玉川大学出版部(1979)
- 22) Encyclopedia International 7, 16, Grolier(1968)
- 23) 同上 16
- 24) 斎藤勇：英文学史, 49, 研究社(昭和13年)
- 25) 山田吉彦・林達夫：フェーブル昆虫記, 岩波文庫第10分冊, 57～73, 岩波書店(昭和47年)
- 26) 同上 71, 72
- 27) 同上(岩波少年文庫) 103, 104
- 28) 同上(昆虫記) 66
- 29) 同上 61
- 30) 同上 62
- 31) 波多野勤子他監修：新イソップ物語, 世界の童話 41, 102, 小学館(昭和55年)
- 32) 同上(昆虫記) 59
- 33) 福原麟太郎：英語教育事典, 718, 研究社(昭和36年)
- 34) 同上(英文学史) 64
- 35) The New Book of Knowledge 6F, (子供百科事典), 2, 3, Grolier(1968)
- 36) 寺西武夫訳註：イソップ物語(対訳), 研究社英文訳註叢書, 132, 研究社(昭和5年)(初版昭和4年)
- 37) 同上(現代のエスプリ) 114
- 38) Maugham, W. Somerset: Collected Short Stories I, 101～104, Penguin Book(1963)